審 査 の 結 果 の 要 旨

論文提出者氏名　　田　中　徳　英

本論文は加賀藩の造営組織の形態について、近世史料および現存遺構を通して明らかにしたものである。近世建築生産史の研究は、文化庁が実施した全国近世社寺緊急調査を契機に大きく進展したが、各藩の造営組織がいかなる形態をとって大規模な寺社を建設していたかは依然として不明な点が多い。本研究はこうした研究史の欠落を埋めるべく、前田氏の大藩・加賀藩を具体的な対象として、加賀藩作事方体制の全貌を明らかにすることを試みる。

本論第１編には加賀藩作事方の構成に関する論考が集められており、第１章では近世初期の加賀藩大工の活動と作事形態、第２章ではその後成立・整備されてゆく加賀藩作事方の職制について、第３章では作事方の具体的な技術と生産活動について、諸史料・棟札と遺構調査にもとづきながら解明される。この第１編は本論のなかの中心的位置を占めるもので、清水文庫・加越能文庫などの地方史料を博捜し、従来ほとんど先行研究のなかった加賀藩作事方の成立と構成がはじめて明らかになったと評価することができる。加賀藩作事方は内作事方・外作事方・寺社方の担当の分掌があり、さらにそのなかに造営に参加する管理体制側（事務系）と御大工頭・御大工・御壁塗等の技術系の職制が成立していた。こうした職制は１７世紀中頃から近世中期にかけて次第に整備・体系化されることが指摘されている。

第２編では第１編の成果を踏まえて、加賀藩における作事方役所の役割について、金沢城・越中愛本橋・峰本社・尾崎神社等の具体的な建築を通した考察が展開される。造営の際の職掌分担は必ずしも一様でなく、各工事の規模・重要性などによって適切な役割分担が設定されていた。たとえば金沢城の文化６年（1809）の再建工事では、城代（２人）・造営奉行（５人）・物頭並作事御用（１人）・作事奉行（２人）・作事奉行加人（２人）・作事横目（２人）・造営方内作事奉行（６人）というように、管理体制側の役人が数多く造営に参加し、作事奉行・御大工頭が主付となっていることから、この造営の規模と重要性をうかがうことができる。また峰本社では、宝暦５年（1755）以降造営組織に大きな変化がみられ、作事方の作事奉行・作事横目・御大工頭・御大工が本格的に造営にかかわる体制が整う。このように、具体的な造営ごとの分析は第１編の制度史的な考察を補完するという意味で、本論の重要な成果ということができよう。

第３編は作事方に属する加賀藩大工がどのような流派に属し、いかなる技術を有していたかを建築の木割・細部様式などから解明する。妙成寺における坂上嘉継、瑞龍寺における山上嘉広の絵様・彫刻などから、彼らは建仁寺流の高い水準の技術を有していたことが明らかになる。また建仁寺流技術は山上嘉広から池上家、さらに大西政乗へと伝承されたことも本研究がはじめて実証した事実である。彼らは江戸時代大工技術書の内容をよく理解しており、それらを身につけたうえで、加賀藩独特の建築表現を追求したものといえる。

以上のように、本研究は従来の近世建築生産技術史のなかで、大きな空白となっていた各地域ごとの技術体系や組織について、加賀藩をその素材としてはじめて具体的かつ実証的に事実を解明したものである。収集した史料も単に文献史料のみならず、絵図・棟札・現存以降など広い範囲にわたり、これらを総合的にとらえたうえで手堅い論述が展開されている。これは著者の地道な長年にわたる研究活動の集大成であり、内容的にも高い評価を与えることができる。

よって本論文は博士（工学）の学位請求論文として合格と認められる。